

氏名	全 志英		
学位の種類	博 士 (理 学)		
学位記番号	博 甲 第 7501 号		
学位授与年月日	平成 27年 5月 31日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	生命環境科学研究科		
学位論文題目	Development Process of Agri-tourism in Sannae-myeon, Miryang-si, Korea —An Analysis of the Eoreumgol Apple Production Area— (韓国密陽市山内面におけるアグリ・ツーリズムの発展過程 —オルムゴルリンゴ生産地域の分析—)		
主査	筑波大学教授	Ph. D.	呉羽 正昭
副査	筑波大学教授	博士 (理学)	松井 圭介
副査	筑波大学准教授	博士 (理学)	堤 純
副査	筑波大学名誉教授	理学博士	田林 明

論 文 の 要 旨

本研究の目的は、韓国密陽市山内面におけるアグリ・ツーリズムの発展過程とそれに関する要因を解明することである。

アグリ・ツーリズムとは、農村空間におけるツーリズムのうち、農業生産活動や農産物と直接的に関係するものを指し、日本では果樹を中心とした観光農園がその伝統的・典型的な形態としてあげられる。一方で、近年重要性を増しているのは直売所や農業体験などである。産地での直売や体験は都市住民による観光行動と結びつき、道の駅などが大きく発展している状況がみられる。アグリ・ツーリズムに関しては、地理学やその隣接分野において多くの研究蓄積があり、観光農園は著名な観光目的地に隣接した果樹生産地域などに立地する傾向が強いこと、観光農園経営農家が組織をつくり、観光客獲得への努力をしてきたことなどが指摘されてきた。これらの研究においては、農家による観光農園や果樹生産の経営実態が調査・分析対象の中心であった。しかし、1990年前後以降、世界的にマス・ツーリズムからオルタナティブ・ツーリズムへ観光行動の重心の変化傾向がみられるようになると、観光行動そのものを分析することが重要になってきている。また、韓国におけるアグリ・ツーリズムに関する研究は限られており、未解明な点が多く残されている。そこで本研究は、韓国において、観光農園や直売所を経営する農家、農業生産に関係する組織といった生産地域内部の主体に加えて、外部主体である観光客の行動を分析することによって、アグリ・ツーリズムの発展過程を解明することを課題とした。

具体的には、第1に、山内面における生産農家によるリンゴ生産、直売所の経営にみられる特性を分析した。第2に、リンゴ生産に関係するさまざまな組織の特性を分析した。第3に外部主体としての観光客の属性や行動を分析した。これらの分析結果それぞれの相互関係を検討し、また本地域がもつ地域条件、韓国の農村におけるツーリズムの変化とそれに関連する政策変化を考慮しながら、アグリ・ツーリズムの発展過程とそれに関する要因を解明した。同地区での詳細な現地調査に基づいて分析した結果、次のことが明らかになった。

山内面は韓国国内では比較的新しいリンゴ産地であり、1970年代以降、山間盆地という自然条件を活かしてリンゴ栽培が増加してきた。この時期は導入期ととらえられ、オルムゴル（氷谷）という観光地に近接すること、またプサンやウルサンなどの大都市からの近接性に優れることといった位置条件に基づいて、リンゴの直売が出現・拡大した。当初は自宅での直売が卓越したものの、主要道路沿いに多くの仮設直売所が立地していった。ただし、アグリ・ツーリズムは空間的にはオルムゴルに隣接する山内面東部に集中していた。

1990年頃から、直売所は仮設から常設へと景観的に変化し、その経営の長期化のためにリンゴ栽培の多品種化が生じ、リンゴ生産は空間的にも拡大した。展開期であるこの時期には、品質の統一やブランド化のために、さらには集客・宣伝を目的とした祭りイベント開催のために、山内面全体におよぶ組織が重要な役割を果たすようになった。その結果、新たな観光客が増加するとともに、定期的に山内面を訪問する常連客も増えてきたことが示された。

2000年以降、韓国国内で農村ツーリズムに対する関心が高まり、国の政策を活用してリンゴ・オーナー制度の導入や宅配による販売増加がみられるようになった。発展期ととらえられるこの時期には、農協を通じた出荷も増えて、山内面全体でリンゴ生産量が増加した。同時に、アグリ・ツーリズムは空間的に拡大し、山内面の広い範囲でリンゴの直売が発展した。その過程で常連客自身が毎年リンゴを購入するとともに、彼らの口コミによって新規顧客の増加をもたらし、常連客の存在がアグリ・ツーリズムの発展に貢献していることが明らかになった。さらに、政策を中心とした外部からの補助金を利用し、それをリンゴ生産やその直売に活用したことによって、山内面ではアグリ・ツーリズムによる内発的発展が可能になったことが指摘された。

審 査 の 要 旨

本研究において、これまで十分に関心が向けられてこなかった韓国のアグリ・ツーリズムを扱った点、その重要な要素である直売所の発展において訪問者の役割に注目した点は、関係する先行研究に対するオリジナリティとして高く評価される。とくに、リンゴ直売所の発展過程における常連客の役割について指摘したことは、観光地理学の分野に新しい知見をもたらすものである。また、韓国密陽市山内面において、リンゴ直売所が発展してきた過程を、農家、組織、観光客、政策という多様な主体の係わりとともに、地域条件とも関連づけて分析した研究方法は適確である。

本研究は、直売所や生産関連組織において、生産者とその関係者、直売所の訪問客に対して、長時間をかけて詳細な聞き取り調査を実施し、それによって得られたデータを、韓国における観光政策、農村振興政策の展開とも関連づけながら実証的に分析した研究である。こうした研究スタイルは、日本のみならず世界のアグリ・ツーリズムに関する今後の研究にも応用されるといった点で重要な意義をもつ。また日本と韓国において、アグリ・ツーリズムの類似点や相違点を示したことを通じて得られた一般性と固有性は、両国における直売所や観光農園の特性解明に大きく貢献した。以上の点から、本研究はアグリ・ツーリズムの展開を追究した、観光地理学の重要な研究として位置づけられ、博士論文として十分な価値があると認められる。

平成27年4月10日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもとに論文の審査及び最終試験を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものとして認める。